
光の王と剣士

赤霊朔羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光の王と剣士

【Nコード】

N6597Y

【作者名】

赤霊朔羅

【あらすじ】

志紀の襲撃から一週間たったある日、綾の紹介で昶達は隣町でコクチと戦っていたという橙色の少年と出会う。

彼の名前は黒崎一護……………死んだと思われていた劉黒の『子』であった。

珍しい、モノクロームファクター×bleachです。
良かったら読んでみてください。

はじめに

この話では、bleachメンバーがモノクロームファクターの世界で暮らしている設定です。

死神等は存在してません。

モノクロームファクターのキャラクターはコミック設定ですが、ドッペルのみアニメ設定です

脱色キャラ達はレイやシンだったりします。

時期的には、志紀の襲撃(?)後です。

昶と一護が総受けになる予定です

それでも大丈夫という方だけどうぞ

脱色キャラクターの設定

黒崎一護

空座高校剣道部の一年

空座高校最強と呼ばれる三人の内の1人

不良のように見られるが優しい少年。

レイで、劉黒の子。基本大きな刀(斬月)で戦っている。

超絶速度で移動、攻撃することができる。

日番谷冬獅郎

空座高校剣道部三年生

一護と同じく最強の1人。

身長は原作よりも高めで150？。

大人びていて冷静だが短気な性格。

彼にチビは禁句。

レイで、劉黒の子。氷を操る能力を持つ。

檜佐木修兵

空座高校剣道部二年生

やっぱり最強の1人。

根は真面目で冷静だが、一護の事になると変態くさくなる。

トレードマークは卑猥（69）な刺青と右側の傷。

レイで、劉黒の子。風を武器にする能力を持つ。

三人とも使っている武器は、それぞれの斬魄刀です。

朽木ルキア

空座高校剣道一年生。

男勝りな少女。
綾の友人。

増えていきます

・

第一章・護りの光 壺

志紀の襲撃から一週間が経とうとした金曜日。

昶達はいつものように屋上で、昼食もとい作戦会議を開いていた。

「昶、放課後空いてる？」

心霊スポット雑誌を片手に白銀とアタリを探していた昶は綾の声に顔を上げた。

「空いてつけど…？どうしたんだ？綾」

不思議そうに昶が首を傾げると、ふざけていた賢吾と、黙って雑誌を見ていた白銀も其方を見た。

「実は、洸さん位強い人達を見つけのよ！」

そう言つて綾は、とある冊子を差し出した。

昶はそれを受け取ると表紙を眺めた。

「……『××県剣道大会』？」

「それ、私がこの前参加した剣道の大会の冊子なんだけど、隣町の空座高校ってあるでしょ？そこの代表の男の子達がスッゴく強かったの。」

白銀は綾の言いたい事を察し口を開いた。

「綾さん。言いたい事はわかります。ですが、一般の人々を巻き込むのは良くないですし、万が一足手まといになられても困りますよ?」

笑顔のままで白銀が言った時、駄け……賢吾が声を上げた。

「……!?ち、ちよつと綾っ!その空座高校の代表って“あの”黒崎達なのっ!」

綾に渡された冊子を見たまま賢吾の顔が青ざめていく。

「……誰だ、ソレ?」

「さすが、賢吾は知ってたわね」

昶が首を傾げ、綾は得意そうに笑った。

「昶、知らないのっ!?昶と同じ位喧嘩が強い最凶の不良達だよっ!」

賢吾がそう言うと、昶は興味なさそうに綾の方を見た。

「……代表ってことは、仲間に取り入れたいのはソイツか?」

「ちよっ!?!俺無視っ!」

「そうよ？……それに、その子達…コクチが見えてるみたいなの、その上倒していたし…」

「…何？」

綾の言葉に昶は驚いたように彼女を見、その後白銀の方を見た。白銀は何か考え込んだ後、綾を見た。

「綾さん。すみませんがその方に合わせてくれませんか？」

・ その日の放課後。

綾の部活が終わった後、昶達はバスに乗って空座高校に向かった。

「な、なあ？何も表向きの用事が無いのに黒崎達が相手してくれるかな？」

賢吾は恐る恐る、綾に聞いた。

「何？賢恐いの？」

そんな賢吾を途中から合流した洸がからかった。

「大丈夫よ。もうこの前の大会で仲良くなった空座の子に連絡してあるから」

そう綾は苦笑した時、目的地に到着し昶達はバスを降りた。空座高校の校門前には黒髪の女子高生が待っており、昶達…否綾を

見ると片手を上げた。

「ルキア！ごめんね。急に頼み事しちゃって」

「構わない。もう奴らには知らせてあるのだが……先輩方はバイトがあるらしく今日話が聞けるのは一護だけみたいなのだが……大丈夫か？」

綾の言葉に黒髪の少女が少しすまなさそうに言った。

「別に構わないけど？良いわよね？」

綾がそう昶達問いかけた。

「良いぞ」

昶がそう答えると、少女は頷き昶達に校舎に入るよう促した。

「はじめまして。私は朽木ルキア、この高校の一年だ。よろしく頼む」

昶達を案内しながら少女ルキアは自己紹介をした。

「二階堂昶」

「オレは、浅村賢吾。よろしくなっ！」

「洗でえすっ！趣味はせ「黙れ！この変態っ！」」

昶達も一人ずつ、自己紹介したが余計な事を言おうとした洸が綾に沈められた。

白銀は見えていないだろうと自己紹介しなかった。

「な、なあ。朽木さん…黒崎達ってどんな奴らなの？」

賢吾が恐る恐るルキアに聞くと、彼女は少し考え込んでから答えた。

「一護は猪突猛進で天然。日番谷先輩は天才で冷静だが少し短気。そして檜佐木先輩は秀才だが少しヘタレているな」

「……一護？」

ルキアが最初に言った名前に洸が呟いた。

（まさか……）

第一章・護りの光 式

洸が考えた時、突然白銀が何かの気配を感じたのか、窓を睨んだ。その途端に窓が割れ、昶達はそれを避け、窓を割ったものであるうコクチに構えた。

「チツ！どうやら綻びがあるみたいですね」

白銀がそう言うのと洸は只の人間であるルキアを抱え安全な場所へと避難させた。

「ルキアちゃん。悪いけど、少し此处で待っててくれるかな」

洸はそうルキアに言うのと彼女の返事も聞かず、昶達の元へと戻って行った。

昶は直ぐさま、シン化するとすぐさまナイフでコクチを斬りつけ、それを避けたモノを綾と賢吾が消していく。白銀と洸もそれぞれコクチを消していった。

全てのコクチを消し終わった後、洸はルキアを迎えに行くために、昶達は綻びを探す為に二手に分かれた。

「あー…なんで話しに來ただけなのにこんな事になってんだろ…」

「綻びがあるからだろ…」

賢吾がそう嘆くと、昶はそう呆れたように返した。

しばらく歩くと、扉が開いている教室があった。

そこを通り掛かった時、昶達の前にオレンジ色の髪の少年がその部屋から飛んできた。

彼の手には真剣が握られている。

その後から数体のコクチが少年を追って出てきた。昶達は少年を庇おうとした。が、少年はそれを抑えた。

「大丈夫だ。だから、中の綻びを頼む」

少年はそう言うときコクチに切りかかっていった。

昶と白銀は一瞬驚いて顔を見合わせたが、すぐに頷きあい、白銀は教室に入り、昶は少年とは反対の方向にいるコクチに切りかかっていった。

教室の中には少年の言ったとおり、綻びが開いていた。

白銀はすぐさま綻びに近寄るとそれを封じ始めた。

「我が御手は零^{みて}の癒し

零は天地を分ける絶対の鏡

光は光に 闇は闇に

在るべき主の下へ帰還せよ

封 結」

白銀が綻びを封じ終わると同時に昶達が戦っていたコクチは全て消えた。

それを確認すると少年は刀を置き、昶達に眉間に皺を寄せたまま笑いかけた。

「ありがとな、綻びを封じてくれて。俺は綻び封じることが出来ないからずっと困ってたんだ」

そう言うと、少年は昶に手を差し出した。

「オレは黒崎一護。アンタ達だろ？オレに話があるっていうのは」

第一章・護りの光 弐（後書き）

一護が別人ですみませんでした。

誤字脱字がありましたらお知らせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6597y/>

光の王と剣士

2011年11月20日16時09分発行